

平成二十九年 度 大妻中野中学校アドバンスト選抜入学試験 問題用紙
(第三回・二月二日午後)

国 語

座 席 番 号
番

受 験 番 号
番
氏 名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて9ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認して下さい。
- (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を記入してください。座席番号と受験番号は算用数字で記入してください。
- (四) 試験時間は五十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

① 次の文章をよく読んで、あとの問いに答えなさい。

あ

私は小さいときから、ドジのくせに好奇心が強く、何でも自分で確かめてみないことには気がすまなかった。わが家に蓄音機ちくおんきと称する大きな箱があった。蓄音機というのは、レコードから音を再生させる装置で、レコードプレーヤーの先祖である。

蓄音機とはいみじくも名づけたもので、その中から次から次へと歌声の聞こえてくるのが、不思議で仕方なかった。きつと中に小人がいるに違いない、と思った。この小人は、女の声も男の声も、さらには子供の声も出せるはずだ。

寝てもさめてもまだ見ぬ小人のことを考え続けた時期があった。幼稚園に入る前の、四歳のころである。この箱は、新しい物好きの父が大枚をばたいて買ったものだ。スピーカの前で犬が音楽を聴いている姿が、トレードマークとしてついていた。わが家の宝物だったので、触れることはおろか、近寄ることさえ、子供には許されていなかった。

そこである日、大人の目を盗んでひそかに忍び寄った。レコードのターンテーブルはゼンマイ駆動くどうだったので、ゼンマイを巻くための取っ手が外についている。まずこれを力いっぱい回すと、ゼンマイが限界いっぱいになって、それ以上は回らなくなった。

試しに、という感じで逆回しすると、カタカタと調子よく回っていたのは束の間、やがて「カキツ」という、子供心にも不穏ふおんと分かる音がして、どちらにも動かなくなった。

ここまでくれば乗りかかった船。蓄音機の蓋ふたをおそろおそろ開け、ターンテーブルやスイッチなど、目につくものをすべて回したり引つ張ったりしてみた。①哲学や方針があつての行為ではない。ただ手当たりしだいである。はずれてとれてしまうものもあつたが、中から小人が顔を出すことはなかった。

この件はもちろん、あとで大人たちに見つかり大目玉をくらった。蓄音機は、修理のためにメーカーにまで行くことになり、しばらく帰ってこなかった。

これにこりてその後は物事に慎重になった、というのなら上等なのだが、そういうことはまったくなく、好奇心から手を出しては、まわりのものをこわす癖くせは治らなかつた。「こわし屋お富美ふみ」の異名はつとに知れ渡るようになる。中学生になってからも、友だちと一緒に学芸会の舞台装置などを作っているとき、②「お願いだから、あなたは手を出さないでね」と言われたりした。

科学者の伝記を読むと、子供の頃から手先が器用で実験装置を作って「何々」を測定した、という類たぐいの話がたくさん出てくるが、私に限って言えば、そういう英雄的なエピソードはまるでない。逆に、「何々」をこわしたという「事件」がわんさとあつて、その詳細を自伝に書くのは気が引

けるものばかりである。

長じて、「実験」物理学ではなく「理論」物理学を選んだのも、四歳のときの蓄音機解体がルーツだといえる。

い

私は言葉を覚え出したところから、「なぜ?」「どうして?」の多い子供だったと、母や祖母がよく話していた。私の質問を、母は面倒がらずによく聞いてくれた。それでもときには、私の疑問を正確に伝えられなくて、悲しい思いをすることがあった。私の語彙が足りなかったり、私の頭の中で疑問の焦点が的確に絞れていなかったり、というのが原因である。

この傾向は、物心ついたときから、小学校高学年まで続いた。一番古い記憶では、幼稚園に入る前の四歳のころのものがある。私は、母から「液体」という言葉を引き出すことができず、とても困った。

母が台所で天ぷらを揚げるのを見ていた。私の見ていたのは、天ぷらではなく油だった。天ぷら鍋にいっぱい広がっていた油が、漏斗の細い口を通り抜けて、油保存用のカンに移されるのを、胸が痛くなるほどの驚きで眺めていた。玩具やテーブルや茶碗や箸などの、身のまわりのすべてのものと違うことが分かった。

油と似たものとして知っているのは、水だけだった。油と水に共通の性質、すなわち容器の形に合わせて自在に形を変え、こぼしてもしたら二度と拾い集められない——そういう属性をもつ物質すべてを総称する言葉があるはずだ。それを知りたかった。しかし、日常会話に必要な単語すら十分に修得できていない年齢だったから、「そういう属性を記述する言葉は?」などという質問の仕方は、もちろんできなかった。舌足らずな言葉で、もたもたと、でも真剣に尋ねた。

連日の「なぜ?」「どうして?」に、母のほうもたいてい辟易して^{注②}いたに違いない。それでも、水と油はいかに相いれない性質をもっているかを説明してくれた。油が水に溶けないことから、^{注①}比喩として一般に「水と油」という表現の使われることまで、幼い私に聞かせてくれた。

それは分かっている。
A
それでもなお、油と水は仲間はずだ。固有の形がない。流れて
いってしまう。

もう泣き出しそうになりながら、しつこく母にまつわりついたけれど、不成功に終わった。知りたかったのは、先にも書いたように「液体」という言葉だった。テーブルや茶碗は、「固体」という状態にあるけれど、水や油は「固体」ではなく「液体」の仲間^{注①}に属している。そういう説明を聞き
たかったのである。

それから幾夜かは、くやしきのあまり眠れなかった。自分の表現力の乏しさが情けなかった。今でも鮮明に覚えているのだから、よほど口惜しかったのだろう。

四歳までのことに関する記憶は「断片的」で、何か大きな出来事があったときのものに限られる。一方、五歳で幼稚園に入園して以来のことは、「連続的」な記憶が残っている。四月には何があった、五月にはかれこれの行事があった、と克明に覚えているのである。季節の経過やさまざまな出来事と一緒に、あの場面この場面で自分がどのように感じたか、どんなにうれしかったか、どれほど口惜しい思いをしたか、なども、昨日のことのように思い出せる。

私は一九三八年（昭和十三年）一〇月に生まれた。日中戦争が始まって一年目で、日本の軍隊は侵略戦争をいよいよ本格化していた頃である。

それから数年後。私が幼稚園に通った一年間（一九四四年四月から四五年三月）は、太平洋戦争も終盤に入り、日本軍の敗色が濃くなっていた時期に当たる。日本本土でも、物資不足や食糧難が深刻になりつつあり、③世の中がザワザワしていた。それでもまだ、自然は平和なときと同じ顔を見せていた。

私にとって、幼い日の記憶は、空とともにあるような気がする。私が生まれ育ったのは、大阪府吹田市である。私が幼稚園の頃には、まだあちこちに畑が残っていたし、わが家の庭にも草木がいっぱいあった。

④周囲に高いビルなどはまったくなかったので、空が広がった。明るい夏の日差しの下で見た青い空と、もくもくとわきあがる入道雲。縁側に腰掛けて、足をぶらぶらさせながら、入道雲が次々と形を変えていくさまを飽きることなく眺めていた。まるで意思あるもののように変形する雲が、なんとも不思議だった。

庭に出て、シャボン玉を空に向けて飛ばした。普通のシャボン玉が、太陽の下では虹と同じ色になるのが不思議だった。

自然はなんと多くの「不思議」に満たされているのだろう。その「不思議」の仕組みをすべて知りたかった。

誇らしげな様子で七色に輝くシャボン玉のそばを、いくつものトンボが通りぬけていく。庭には色とりどりの花が咲き乱れ、さまざまな種類の蝶がたわむれている。すべての生き物が空に抱かれて、のびやかに息づいており、空はひたすら大きかった。

*

夜の空も忘れられない。冷房のなかった当時は、夏の夕食後、庭に縁台を出して夕涼みすることが多かった。ネオンや街灯も皆無に等しかったので、降るような満天の星が鮮やかに見えた。ほらあれが天の川、あちらの星が彗星、こちらの星は織姫星、と母が教えてくれた。

星の名前を覚えて得意になっていた私は、やがて、星と星との間の空間に目をやるようになった。あの空間の、星よりずっとずっと先の、そのま

た先の先はどうなっているのだろうか。あの向こうには端つこがあるのだろうか。それとも、端つこなどはなくて、どこまでも、どこまでも、果てしなく続いているのだろうか。空を見るたびに、考えていた。⑤考えるだけで空に吸いこまれていきそうな気がした。

(米沢富美子『まず歩きだそう 女性物理学者として生きる』岩波ジュニア新書より)

注

①漏斗……口の小さい入れ物に液体を入れるときに使う、あさがお形の道具。

②辟易……困り果てること。

問一 本文中の「あ」
「う」には、次の1〜5の小見出しのいずれかが入ります。それぞれにふさわしい小見出しを補い、番号で答えなさい。

- 1、月の満ち欠け
- 2、「なぜ？」を連発していた毎日
- 3、直角と二直角
- 4、蓄音機解体
- 5、宇宙の果てに思いを馳せる

問二 ——部①「哲学や方針があつての行為ではない。」とありますが、筆者が自分の行為の理由を示した漢字三字を本文中から探して答えなさい。

問三 ——部②『「お願いだから、あなたは手を出さないでね」と言われたりした。』とありますが、友人が筆者にこのように言ったのはなぜですか。三十五字以内で説明しなさい。

問四 本文中の A に入る最も適切なものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、やはり、水と油とでは、異なる性質はわずかとはいえ認められる
- イ、しかし、水と油とでは、異なる性質はさほどあるとは思えない。
- ウ、もちろん、水と油とでは、異なる性質はたくさんあるだろう。
- エ、もちろん、水と油とでは、異なる性質などありはしない。

問五 — 部③ 「世の中がザワザワしていた。」とありますが、どのような様子を表していますか。二十五字以内で説明しなさい。

問六 — 部④ 「周囲に高いビルなどはまったくなかったので、空が広がった。」とありますが、どのような様子を表していますか。二十五字以内で説明しなさい。

問七 — 部⑤ 「考えるだけで空に吸いこまれていきそうな気がした。」とありますが、これについて説明した次の文の空欄にふさわしい語句を本文中からそれぞれ三字以内で探してそのまま抜き出して答えなさい。

空の ① のことを考えていると、他の生き物たちと同じように自分もまたひたすら大きく広い空に ② て生きていることを自覚し、 ③ が遠くなるような感じがしたということ。

問八 次のア～エについて、本文中の内容と合致するものには○を、合致しないものには×をそれぞれ解答欄に記入しなさい。

ア、筆者は、わが家にあつた蓄音機の中に男女それぞれの小人がいると一日中考え続けていた時期があつた。

イ、語彙が足りずに自分の疑問を正確に伝えられなくて悲しい思いをした筆者の一番古い記憶は四歳のころのものである。

ウ、筆者が幼稚園に通つた一年間は日本軍の負けそうな気配が強くなつていたものの、自然は依然として平和な時と変わらなかつた。

エ、太平洋戦争末期を迎えて筆者の故郷はネオンや街灯が規制されていたため、満天の星が鮮やかに見えた。

三 次の各問に答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 ー部の言葉を、漢字はその読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 休日は専ら芝居を見に行く。
- ② 飼い猫が背中を反らせる。
- ③ 彼女はユウフクな家庭で育った。
- ④ 雨が降り出しそうな空モヨウだ。
- ⑤ 美しくヨソオウ姫君。

問二 次のA～Eは、ある語句の意味を述べたものである。

()の中の字数指定に従って、A～Fそれぞれに当てはまる語句を漢字で書きなさい。

A (漢字二字)

意味…①世間または天間地。万物を包容する空間。②時間・空間内に秩序をもつて存在する事物の総体。また、それら全体を包むひろがり。
③すべての時間と空間およびそこに含まれる物質とエネルギー。④すべての天体を含む空間。また特に、地球の気圏の外。

B (漢字二字)

意味…①他に並ぶものがないこと。他との比較・対立を絶していること。一切他から制限・拘束されないこと。
②決して。断じて。どんなことがあっても必ず。

C (漢字二字)

意味…①組み立てること。組み合わせる一つのまとまりを作ること。②織物でよこ糸とたて糸とを組み合わせることを。

①ほぼ同形・同大で、働きも似通った細胞の集団。集まって器官を構成する。

④ある目的を達成するために、分化した役割を持つ個人や下位集団から構成される集団。

D (漢字一字)

意味…①人間の精神作用のもとになるもの。また、その作用。

①知識・感情・意志の総体。②思慮。おもわく。③気持。心持。④思いやり。なさけ。⑤情趣を解する感性。⑥望み。こころざし。

② (比喩的に用いる)

①おもむき。風情。②事情。③趣向。くふう。④意味。⑤わけ。なぞ解きの根拠。

③①心臓。胸。むなさき。②物の中心。

E (漢字一字)

意味…①睡眠中に持つ幻覚。ふつう目覚めた後に意識される。②はかない、頼みがないものたどえ。

③空想的な願望。心のまよい。④将来実現したい願い。理想。

※語句の意味は全て『広辞苑 第六版』(岩波書店)より引用

B ことわざ・慣用句に関する問題

問三 次の慣用句の [] に当てはまる漢数字一字を答えなさい。

① [] 事休す

② 石の上にも [] 年

③ 悪事 [] 里を走る

④ 朝三暮 []

⑤ 一寸の虫にも [] 分のたましい

C 文法・言葉遣いに関する問題

問四 次の表現で正しいものには○を、間違っているものには×を解答用紙に記入しなさい。

- ① 今日は祖母がむかえに参りますので、よろしく願います。
- ② では、機会を改めてやらさせていただきます。
- ③ 申しわけありませんが、祖父は外出しています。
- ④ その件は、あちらの案内所でうかがってください。
- ⑤ 院長先生が申されたとおりに診察の準備をいたしました。

